

きょうと福祉倶楽部だより

2022年 2号

「老後」の居場所について考える

人は老います。それは避けられません。

本人が望んでも、家族が望んでも、老いをとどめることはできません。

これから先も急速に高齢者は増え続けます。

そんな中で人生の最終盤をどこで過ごすのが大切な問題になってきます。

「身体が不自由になったら家で過ごすのは無理だよ」という声を良く聞きます。

そして、そういう需要にこたえて多くの高齢者を収容する施設ができています。

公的な施設は社会福祉法人が運営する特別養護老人ホーム。

もうひとつは営利企業が経営し、営利を目的としているのが有料老人ホームです。

いま介護制度がどんどん市場化するなかで前者も後者も入居するのには相当な費用を必要とするようになりました。しかし、とりわけ後者は莫大な費用負担を必要としています。

ここに長岡京市内の大手有料老人ホームが公表している費用をお示しします。

初期費用 0円～1800万

月額費用 44万円～26万円

この費用をご覧になってみなさんは「これぐらいならなんとかかなる」とお考えになりますか？「とてもそんな金額は出せない」とお考えになるのでしょうか？

まず、「これぐらいなら」とお考えの方にお知らせします。

高齢者に必要なのは介護だけではありません。

医療も必要です。

施設は医療機関ではありませんから入院しなければならないこともあります。

その時には施設の部屋を確保するためには費用の支払いが続きます。

それに加えての医療費です。

それだけでなく室料差額も必要になるかもしれません。

そうすると毎月の費用は年金では到底支払額には足りません。

「お金がかかりすぎる」と考えてお家に帰ることを考えても終の

棲家はホームと考え、自宅を処分なさっている方もいます。

そこでみなさんにきょうと福祉倶楽部で支援を7年間続けているMさんをご紹介します。

Mさんは若い頃は自治体病院の看護師さん。

指導的立場に立ち現場を采配する能力のある方でした。

夫を先に亡くし、それからは一人で暮らしていました。

そのMさん、アルツハイマー型認知症になってしまいました。

当時の主治医は「独り暮らしは無理だから施設に入れるか身内の方が面倒をみる必要がある」と右京区在住の妹さんに伝えました。

妹さんの決断は「自分の家に連れて行く」でした。ところが何度連れて行っても必ずMさんは長岡京の自宅に一人で帰ってしまうのです。妹さんとの同居は失敗しました。妹さんは施設の入所も考えました。

でも施設はお金がかかりすぎます。妹さんは、困りは果てます。

そしてその方が知人を通じてたどり着いたのがわたしたちきょうと福祉倶楽部。

わたしたちのご自宅での生活の可能性を探りました。

これまでのケアプランの全面改定です。

その結果、今でもご自宅での生活を公的なサービスだけで継続出来ています。

きょうと福祉倶楽部のヘルパーはその時から今日までこのMさんを支えています。

介護費用も月額10万円にも満たない金額で可能です。

もちろん食費や水光熱費などは別途必要ですが十分に年金の範囲で生活を維持しています。在宅の重度障害者には国の手当ても支給されます。だから預金は減ることもありません。

当初Mさんの表情は硬く、無表情でした。それが、時がたつにつれ笑顔が戻ったと初期から関わったヘルパーは言います。

わたしも何度もMさんのおどけた表情で迎えて頂きました。

7年の歳月はこの方の老いをさらに進め、現在Mさんは歩く力も失いつつあります。それでも彼女はご自宅で朗らかに暮らしています。

こんな実践がわたしたちスタッフの元気の補給庫です。